

ナルの意味解釈

—可能の意味に着目して—

関秀一 東北大学

1 はじめに

動詞ナルの基本義は変化であるといわれているが(安達 1997;蘇 2005)、本研究で検討するのはナルの文に見られる可能の意味機能である。ナルという語は一般には自動詞として扱われ(奥津 1967 他)、自動詞の典型ともいわれているが(庵 2001:134)、どのような基準で自動詞とされているのだろうか。また、自動詞と可能が密接な関係にあることは先行研究でも取り上げられているが(井上 1976 他)、すべての自動詞がそれに該当するわけではない。ナルが自動詞だとすれば、ナルは可能とどのような関係を示すのか。これらの疑問点の解明には次のような順を追って検討する必要があるだろう。①ナルは(典型的な)自動詞か②自動詞と可能とはどのような関係にあるのか③ナルと可能とはどのような関係にあるのか。

以上の流れで先行研究を概観しながら、またデータ分析によりナル構文が可能の意味を帯びるのどのような場合かを検討する。

そして、本研究では、ナル構文に可能の意味があるのではなく、情報の受け手である構文の読み手が文脈から可能の意味を読み取っていることを主張する。その根拠として小説データの分析考察結果から可能との意味解釈ができる条件を示す。さらに、ナルにおける可能の意味は否定表現に限られる、または、否定表現に多く見られるとする先行研究に関し、本研究ではデータ分析を通して、可能の意味解釈ができるデータは肯定表現でも十分に見られることを提示する。

2 先行研究

2.1 自動詞に関する先行研究

須賀他(1995:230)は、自他の判別は、形態的な自他の対応、動詞とヲ格名詞との意味関係、直接受身の成立の可否という三種類の手掛かりによってなされ、典型的な自動詞または他動詞はこれら三種類の手掛かりすべてにおいて自動詞的または他動詞的

特徴を持っているものとしている。須賀他(1995)を参考にした分析は、ナルが(典型的な)自動詞かどうかを考察するのに有効と考えられる。

2.2 自動詞と可能に関する先行研究

Shibatani(1985)、Jacobsen(1989:240)は自発表現¹でも特に否定の自発表現に可能の意味が生じやすいと述べ、その根拠として、(1a)が(1b)のように置き換え可能であることを挙げている。

- (1) a. いくら押しても窓が開かない。
(Jacobsen 1989:240 (86))
b. いくら押しても窓を開けることができない。

また、井上(1976)は、自動詞化形式素 *re* (e) と可能形式素の音形上の類似を次のように示している。

- (2) a. 花子には、ケーキがうまく焼けた。(井上 1976:83 (20a))
b. ケーキがうまく焼けた。(井上 1976:84 (20b))

井上(1976:84)によれば、(2a)が可能文で(2b)は動作主の省略との解釈ではない場合に自動詞文である。

以上の先行研究を見ると、自動詞と可能は密接な関係にあるといえる。

2.3 ナルと可能に関する先行研究

Jacobsen(1989:241)はナルに関して「(略)可能の意味が生じるのは否定の場合に限られているようである」とし、(3)を示している。

- (3) 長年辛抱していた夫の行為がとうとう我慢
ならなくなった。(Jacobsen 1989:241 (97))

また、蘇(2005:134-135)では、ナルの可能の意味は否定表現に多いが肯定表現にも見られると指摘している点が新しい。ナルに可能の意味があるとす

¹ Jacobsen(1989)では、自動詞文の表現と自発表現をほぼ同じ意味で用いているようである。

る根拠としては、ナルがデキルという形態と置き換え可能であることを挙げている。

- (4) a. 最終報告書は現場教師には大いに参考になるのではないか。(蘇 2005:135 (24))
b. 最終報告書は現場教師には大いに参考にできるのではないか。

3 先行研究と本研究の立場

上述先行研究では、ナルという形態がデキルという形態に置き換えることができることからナルには可能の意味機能があるという考察がなされている。実際に、デキルという形態に置き換えることができるナル構文は可能の意味を帯びているようである。以下の用例を見てみよう。(5a) はナルをデキルと置き換えることができる用例、(6a) はできない用例である。

- (5) a. ガキどもを追い払おうと思ったが、何かあったときに盾になると考えてやめた。(不夜城)
b. ガキどもを追い払おうと思ったが、何かあったときに盾にできると考えてやめた。
(6) a. びしょ濡れになりながらあたしはただ黙々と走っていた。(ラヴレター)
b.* びしょ濡れにできながらあたしはただ黙々と走っていた。

では、なぜ、デキルと代替可能なナル構文 (5a) とそうでないナル構文 (6a) があるのだろうか。本研究では、ナルとデキルを置き換えることができる条件、すなわち、ナル構文が可能の意味を帯びているとの解釈が成立する条件について分析考察する。

4 分析方法

分析に用いたデータは末尾掲載の現代小説三冊²から筆者が作成したコーパスである。

4.1 自動詞とナルの分析方法

はじめに、前述の須賀他 (1995) の指摘をもとにした形態的な自他の対応、動詞とヲ格名詞との意味関係、直接受身の成立の可否という観点からナルが

² 小説を選択する際の基準は次の二点である。ジャンルの異なる小説であること。また、今後の研究方向として日中対照分析を視野に入れているため、中国語翻訳版が出版されている小説であること。

(典型的な) 自動詞といえるのかどうか検討する。

4.2 ナルと可能の分析方法

ナル構文が可能の意味を帯びるとすればどのような条件下でそうなるのかを明らかにする。本研究では、まずはじめに筆者作成の小説データコーパスを用いナルの文を抽出する。次に前述の Jacobsen (1989) 及び蘇 (2005) を参考にしながら実際にナルをデキルという形態に置き換え、デキルという形態と代替可のデータと不可のデータにはどのような違いがあるのかを分析考察する。

5 自動詞とナルの分析結果

5.1 形態的な自他の対応

ナルとの対応で取り上げられる動詞にはスルがあるが、形態的な自他の対応という場合は、自他で語根を共有している必要があるため、ナル *na-ru* とスル *su-ru* では形態的な自他の対応が見られないことになる。野田 (1991) で取り上げているとおおり、ナルとスルは語彙的なヴォイスの対立といえよう。一方、形態的な自他の対応については奥津 (1967) の指摘にもあるようにナルとナスで説明ができる。以下の例を見てみよう。

- (7) a. 太郎が大事業をなす。 *na-su* (作例)
b. 大事業がなる。 *na-ru* (作例)

ナスとナルは語根を共有しており、形態的な観点から自他の対応を見た場合はナルが自動詞、ナスが他動詞といえる。

5.2 動詞とヲ格名詞との意味関係

須賀他 (1995) では、動詞の自他判別の完全な判別方法ではないとしつつも、ヲ格名詞をとることが他動詞であることの大きな要素と述べている。ナルの用例を見てみよう。

- (8) 富春の礼儀がなっていないのは (以下略)
(不夜城)

- (9) しかたなくあいつになったつもりで (以下略)
(ラヴレター)

ナルの前に名詞がくる場合、(8) のような少数の例を除けば、その他は二格をとる。よって、ヲ格名詞との意味関係という観点からすると、ヲ格名詞をとることのないナルは自動詞といえる。

5.3 直接受身の成立の可否

直接受身が作れるものを他動詞とする判別はこれまでの先行研究で示されているとおりであり(三上1953他)、次の用例が典型的なものであろう。

- (10) a. 太郎が花子を殴った。(作例)
b. 花子が太郎に殴られた。

一方、次の例が示すとおり、ナルの文は直接受身を作ることができないため、直接受身の成立の可否という観点からは自動詞と判別される。

- (11) a. 太郎が医者になった。(作例)
b.* 医者が太郎になられた。

以上、須賀他(1995)の指摘を基に、形態的な自他の対応、動詞とヲ格名詞との意味関係、直接受身の成立の可否という三種類の手掛かりからナルの自他を判別したところ、ナルは三種類の手掛かりすべてにおいて自動詞的特徴を有しており、典型的な自動詞といえることが分かった。

6 ナルと可能の分析結果

ここまでの分析で、ナルが自動詞であること、また、自動詞が可能と密接な関係にあることを示した。ここからは、ナルと可能の分析を行う。

6.1 ナルと代替可能な形態

前述のとおり先行研究では、ナルとデキルを置き換えることができることからナルには可能の意味があるという考察がなされている。また、ナルにおける可能の意味は否定表現に限られる、または、多いという指摘があったが、ここで、筆者作成の小説コーパスから抽出したデータ数を示しながら分析していく。

まず、ナルの文の総数は901個である。これは「異なる」「重なる」などのように一つの語句として固定化しているものを除いた数である。このナルの文901個のうち、ナルをデキルという形態に置き換えることのできたデータは51個であった。

また、本研究では、データ分析の過程で次のような考察結果を得た。すなわち、ナルと代替する形態はデキルだけではなく、可能を表わす形態であるrareを付したナ(ラ)レ³に拡大して分析するのが適当ではないか、というものである。次の例を見

³ 現実の使用では、ラを抜いたナレ³という形態で定着している。

てみよう。

- (12) a. そして、私の愛する人たちがすべて今より幸せになるといいと思う。(キッチン)
b.* そして、私の愛する人たちがすべて今より幸せにデキルといいと思う。(作例)
c. そして、私の愛する人たちがすべて今より幸せにナレルといいと思う。(作例)

上記の用例では、(12b)のようにナルをデキルと代替すると不適格であるが、(12c)のようなナレルとの代替では適格文であり、また、内容に着目しても(12a)(12c)間で大きな差異は生じていないようである。よって、本研究では、デキルと代替できないナルの文でも、ナレルと置き換えることのできる文脈であればその文からは可能の意味を読み込める可能性があると考えられる。ナルの文901個のうちナレルと置き換え可能なデータは21個であった。

また、デキル・ナレルという形態と代替可能なデータ72個(デキル51個+ナレル21個)のうちナルの肯定形は44個、否定形は28個であった。先行研究によれば、ナルにおける可能の意味は否定表現に限られる、または、多いとのことであったが、本研究のデータ分析では肯定形の方が多いという結果が示された。

6.2 ナルとデキル・ナレルとが代替可能な条件

ナルの文にデキルと代替可のデータと不可のデータがあることは前述(5)(6)のとおりであるが、両者にはどのような違いがあるのだろうか。本研究ではナルと可能を意味する形態であるデキル・ナレルとが代替可能な条件を文脈から広く分析することでその間に迫った。また、この条件はナル構文が可能の意味を帯びているとの解釈が成り立つ条件といってもよいであろう。ナル構文が可能の意味を帯びていると解釈できなければ、可能を意味する形態であるデキル・ナレルと代替することができないと考えられるからである。

はじめに、結論から示すと、本研究が用いた小説データの分析から導き出した条件は次の二点である。

- (i) 有情物動作主³の存在(明示、非明示を問わず)があること
- (ii) 文脈からその有情物動作主または話し手における達成感、喜び、利益を読み取れること

ここで、二つの条件 (i)(ii) を念頭に入れながら次の用例を見てみよう。はじめに、デキルまたはナレルと代替可能なデータ、すなわちナル構文から可能な意味を読み取ることのできる用例である。

- (13) a. 小姐、健一はそれほど頼りになる奴ではない。(不夜城)
b. 小姐、健一はそれほど頼りにできる奴ではない。

(13a) では、話し手(非明示)と有情物動作主(小姐)が別に存在している。そして有情物動作主(小姐)にとっての「頼る」という事柄は喜びや利益の性質を有している、と情報の受け手である読み手が解釈した場合はナル構文が可能な意味を帯び、その結果としてナルをデキルと置き換えることができるのである。

次に、デキルまたはナレルと代替できないデータ、すなわちナル構文から可能な意味を読み取ることのできない用例である。

- (14) a. 次の瞬間、耳のすぐ下を殴られた。ぱつと顔が熱くなった。(不夜城)
b.* 次の瞬間、耳のすぐ下を殴られた。ぱつと顔が熱くできた／なれた。
(15) a. けたたましいクラクションの音で信号が青になっているのに気づいた。(不夜城)
b.* けたたましいクラクションの音で信号が青にできている／なれているのに気づいた。

(14) では、言語表現的にも現実にも顔が熱く変化したのであり、自分で顔を熱く変化させたとはいえ難いため、ナルの文に有情物動作主は存在しない。また、(15) では、信号が赤から青へ変化し、その変化後の状態を表わしているため、有情物動作主は存在しない。このように単なる事象や状態を表わす文脈では、動詞ナルにおける有情動作主が存在することはない。そして、このような文脈では可能な意味を読み取ることができず、デキルまたはナレルとの置き換えができないのである。

以上の分析から、上述の二つの条件 (i)(ii) を共に満たすことにより、ナル構文が可能な意味を帯びているとの解釈が成り立ち、その結果としてナルをデキルまたはナレルと置き換えることができるのではないかとの結論に至った。

【参考文献】

- 安達太郎 (1997) 「「なる」による変化構文の意味と用法」『広島女子大学国際文化学部紀要』4, pp.71-83.
庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
井上和子 (1976) 『変形文法と日本語(下)』大修館書店
Wesley M.Jacobsen (1989) 「他動性とプロトタイプ論」久野暉・柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版 pp.213-248.
奥津敬一郎 (1967) 「自動詞化・他動詞化および両極化転形 一自・他動詞の対応一」国語学会『国語学』70,pp.46-66.
佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
Shibatani, Masayoshi (1985) Passive and Related Construction. *Language* 61-4, pp. 821-848.
須賀一好・早津恵美子 (1995) 「動詞の自他を見直すために」須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』ひつじ書房 pp.207-231.
蘇文郎 (2005) 「「ナル」の多義構造」『台大日本語文研究』8,pp.125-144.
野田尚史 (1991) 「分法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版,pp.211-232.
三上章 (1953) 『現代語法序説：シンタクスの試み』刀江書院(本稿ではくろしお出版による復刊版(1972)を用いた)

【参考資料】

- 岩井俊二 (1998) 『ラヴレター』角川書店
馳星周 (1998) 『不夜城』角川書店
吉本ばなな (1988) 『キッチン』新潮社